

蘆刈

あしかり

加藤一雄



蘆刈

あしかり

加藤一雄

人文書院

加藤一雄 (かとうかずお)
 1905年大阪生。戦前は京都絵画専門学校に、戦後は京都市美術館、関西学院に勤める。著書『無名の南画家』

0
0
9
3
—
0
0
0
0
4
5
—
3
2
6
6

印刷 株式会社大洋社
 製本 坂井製本所

京都市下京区仏光寺通高倉西
 振替京都二〇三 電話五三三九
 発行所 人文書院

発行者 渡辺睦久

昭和五十一年二月二十日印刷
 昭和五十一年二月二十八日発行

著者 加藤一雄

小説
 蘆刈
あしかり

© Kazuo Katō, 1976
 Printed in Japan

蘆

刈

先生の名は京屋佐吉と申しまして、打ちつづく乱世に恐れをなし、京阪沿線の片隅に逼塞して細々と暮しておりました。新古今集は経信卿の歌――

みしま江の 入江の真菰

雨ふれば

いとどしをれて 刈る人もなし

の風情でありましたが、終戦後、御承知の通り文化人が大量に世に出てまいりました折、先生もつい人ごみに押されて穴から出ることでとなり、京阪の美術界の業界誌に時たま雑文などを書くこととなりました。その関係上、というほど実には必要もないのですが、そこは古風な先生のことゆえ、伝統的パターンに従って「半残」という号をつけました。こんな消極的なひがんだような号は誰もほめてくれるものありませんが、先生自身としてはこれで仲々お自慢の号なので、実は明治のジャーナリスト戸川残花から来ております。先生どうしたことかこの幕臣の

成れのはての英才を非常に尊敬しておりまして、せめて残花大人の半分の値打でも頂戴致したいという意味から、半残とは名のつた次第でございます。「何、ハンザンだつて？」と、先生の古い友達の遠谷細一郎というシナ学者が言いました、「それは王安石の号じゃないか」。王安石というとてもない大物が出てきたのには、今度は先生の方がびっくりしております。但し、これは遠谷先生が半山と半残を聞き違えているので、もしこれが解ったら先生二度びっくりすることでありましょう。

当節の知識階級の間では、とかくこの種のトンチンカンのことが起りがちでありまして、トンチンカンと言えば、先生業界誌の雑文かきをやっております間に、今度は大阪近くの××大学というのから美学の講師の口がかかってまいりました。かける方もかける方なら、受ける方も受ける方で、世が世なら到底こんな現象は起る筈もありませぬが、そこが乱世というもののございましょう、先生洒々として大学の講師になりすまし、「おれは昔からしつかり英語フランス語をやつてあるから大丈夫なんだ」と言っております。さてしかし、どんなものでありましょうか。先日も先生の講義を聴いている学生に先生の評判のほどを聞いてみましたところ、「そんなこと気にせんでもよろしいがな」と、至極落付いた返事でありました。この頃の学生は二十になるやならずで、もうちゃんと大人に成っております。しかしその方面の事情通に聞きますと、日本の学界では、西洋語の神通力はまだ仲々のものだそうで、蘭学事始以来百五十年の老狐はまだ落ちぬのでございましょう。いずれにせよ、先生のあの程度の語学でも何とか

ごまかしが利くとは、先生のためにはお目出度い話で、一方今更乍ら、乱世の有難さが偲ばれます。

さて半残先生は週に二、三度学校へ出かけて行って、広い研究室の一隅に陣どり、氣に入りの学生をよんで碁を打っております。当節の学生はルネッサンス末期のイタリヤ少年みたいな風体をしておりますから、彼らが蓬髮垢面の老先生と碁を打っている図は、宛然ローマのカラヴァッジョあたりの絵を思い起させると、これは西洋史の教授の形容であります。この形容はその当の学生にはかなり撫媚的らしいのですが、半分の該当者である先生としましては撫媚どころの騒ぎではない。いつまでたってもザル碁の手が上りませんから、実は悪戦苦闘の真最中なので、従ってむやみやたらと葉巻をふかせます。その葉巻なるものが例の一本六十円の安物とききますので、臭いことおびたしい。この臭い煙を先生容赦もなく相手の学生のポッチチエリの絵のような頭髮に吹きかけます。その学生の母なる人、吾子の洗濯物をする毎に近來とみにヘンな匂いのすることに氣がついております。香水白粉の匂いでないから、もしやの事もありますまいが、伴の一身に何か異変の兆があることはつとに解ります。朝な朝な小遣をもたせ、サンドウィッチを用意して送り出してやる子が、まさか学校で先生相手に碁を打つていようとは、この哀れな母親は氣のつく筈もありませぬ。もつとも、先生の方は碁相手の学生たちを大層にほめております。「彼らの碁にはなかなか得がたい趣おもむきがある。国立大学でやってみろ、こゝろは行かんのだ」と。それはそうでもありませんが、後半分のフリーズは、例によって、先

生の要らざる注釈と申してよろしいでありましょう。

先生研究と称して四季折々の旅行に出かけます。事実研究に嘘のある訳ではないので、美術史の若い助教授を中心に二、三人の学生と車を交えた一団を作り、幾日かの泊りがけで仏像・仏画の研究旅行に出かけます。大体美術史という学問は、新しく出来た学問だけに、大層スタイルを気にかけます。つまり、最も学者らしく学問らしく見えねばならないという科（しな）の多い学問なので、当り前のことをしていた日には仲間以外れてしまいます。細かい細かい珍しい物を研究対象というものに致します。

幸い半残先生のお仲間の助教授がこの方面の機微に通じた秀才なので、先生らの乗った車は飛花落葉をくぐり抜け、山の奥のそのまた奥の古寺などに行くことがよくあります。当世当派の学問にはさまざまな道具立が要りまして、カメラを据えたりライトを当てたり、なかなか学問らしい嬉しい科（しな）を作ることになっている。助教授やら学生やらがイキとイナセの恰好でこの仕事をしている間中、先生は例の安物の葉巻をくわえて呆（ぼんや）りと寺の縁側などに坐っております。

先生の記憶によれば、由来学問と申すものは辛い悲しいもの——とまでは言わないにせよ、

少くとも地味な引き合わぬ仕事で、現に先生の友達で一廉（ひとかど）の学者になった連中でも、長い辛気な陽の目を見ぬ仕事の果てである。それでさえ、文化勲章は一人もなく、学士院賞さえめったに当りません。「ねえ君、僕も六十になって漸く学問なるものの莊嚴とその幸福が解るような気がしてきたよ」と、それらお仲間の一人が言っておりますが、色食両欲がうすくなったら、

学者先生でなくとも、誰でも幸福にはなれましょう。それならば一層、いま先生の目の前で立働いている若ものどもの、ちっとも莊嚴ではないが、軽便で機械仕掛けでスタイルも悪くはない学風の方が、還暦を待たず立ちどころに、もっと生きのよい幸福を提供してくれることに間違ひはありません——先生甘臭い煙の中でここまで考え及んでまいりましたが、だからと言って別にどうってこともない。このあらゆる理窟が現実結びつかず、一切の結論が実証を伴わぬ人文科学というものは、曖昧模糊として、はなはだオレの性分に合うている、と今更乍ら先生感心しております。

立働く学生たちの方を眺めますと、うす暗い堂内で彼らは愛染明王の像を写真にとろうとしてゐるらしい。「愛染さまか」とつぶやいて先生もやっと重い尻をあげました。幼い頃、泣癖ついた先生を直すため、叔母なる人が手を引いて幾度か天王寺勝鬘院の愛染さまにお詣りを致しました。爾来この明王にだけはさすがの先生も頭が上りません。この山奥のそのまた奥の寺の明王像、ぼろぼろに剥けていますが、獅子冠をかぶって煩惱断絶の弓箭を振りかざしておられるところ、まさしく、幼い頃に拝んだお姿に変わりはありません。その尊いお姿の前に、先生は老いて悲しい白頭を深々と垂れました——近年しきりに過ぎこし方が思われます。

やはりこの種の研究旅行で、去年の夏、先生らは但馬の方に出かけたことがありました。助教梶梓君は例の大乗寺の応挙一門の襖絵に用事があり、先生の方は丹後半島が見たかった。当地方は近来とみに過疎化しているという評判を聞き、先生の遊心抑えがたいものがあつたので

す。

もともと、初めさして期待もしていなかった大乘寺の応挙に先生大変感激したのは事実で、というのが、応挙晩年の傑作でありますあの郭子儀の絵が先生非常に気に入りました。福祿寿の三徳を兼備した老將軍が庭で孫たちと遊んでいる——このテーマの目出度さが瑣細な美学論を超越して、万事を光被する、というのが先生感激の主たる理由でありました。梓助教授、「はーん、先生はパノフスキを読んだな」と、口には出さぬが、心には思うております。先生の説をも少し高級化すると、誤またず、最近流行の圖像学派というものになるではありませんか。大体一流学者というものの特徴は、自分の学説を通俗的流行型に創りあげる一種の神通力を持っているもので、梓氏の見るところ、半殘先生はこの神通力には頗る弱い。曖昧模糊としたものには割りに強いくせに、近代ばやりの科学風な論理性にはころりと参るところがあります。神通力が論理の衣裳を借ることがあるという、ここところが先生には解りません。但し、当件のみについて申せば、万事はまだ若い梓君の買いかぶりでありました。実は先生パノフスキも何もご存知ない、この爽快な無知の上に立って無茶苦茶を言うているのです。そして先生無茶をいうときには、その微かな根拠原典は芝居講談から出てきます。今回の応挙の郭子儀も多分先生の講談趣味に触れるところがあつたのでしょう。講談の中でも中国の故事をひきますのは高級の部に属します——いかに先生でも、この程度の高級さは持っているのです。

先生は丹後半島の中でも、取りわけ、経ヶ崎から間人の町に行きたがっておいりました。一つ

にはこの辺りがまことに荒涼としてゐること、荒涼の風景は先生の趣味なのです。そして一つには、間人の町が先生の母なる人の生れ故郷と聞いているからです。吉田東吾の「日本地名辞典」によりますと、「あやづ按に間人は愛人の義なるべし、古言に愛をはしきと曰へり……」と書き出しまして、「間人はハシウトと訓むべし、之をタイザに仮るは其の故ある事なるべけれど、今詳にしがたし云々」と書いてあります。まことに古風な好い文章で、こんな辞典は読んでいただけでも気持がよろしい。旅行社の出している案内記には、間人は聖徳太子のお母さま穴穗部間人皇女からその名を得ていると書いてあります。それから、これは先生の友達の骨董好きの人が言っていたことなのですが、蕪村の母親というのは、実は丹後の間人から大阪へ女中奉公に出てきた娘で、蕪村を生んだ後またひっそりと在所へ帰ってしまった、と教えてくれました。骨董屋の業界誌に考証的随筆として載っていたのだそうですが、「先生もああいう風なイキで渋い考証物をお書きやすとよろしいのに」と、余計な感想までつけ加えておりました。

それはともかく、こうなりますと、お太子さまと与謝蕪村と半残先生と、この三人の母者人はいずれも間人の町に何らかの因縁をもっておるということになります。先生このことが魂にしみて嬉しいので、かねてから丹後半島の眇たる町を唯の場所とは思っておりません。

先生らが間人に泊りました日は、偶然強い低気圧が日本海を通りました直後で、海はぐうぐうと時化ておりました。間人ヶ鼻の大巖に寄せて碎ける濤は、冲天高く散乱して霧のように拡がります。唯さえロマンチックな場所柄に、これはまた、悽愴の悲調さえ加わりまして、当節

の若ものたち、この種の調子には敏感でありますから、巖頭に立つて飛沫にぬれ、それぞれ写真のとり合いをしています。乱髪で背が高く手足の細いシルエットは、半残先生の眼裏におきまして伊良湖岬の麻統王^{マキタウ}を思い起させます。

うつせみの 命を惜しみ

濤にぬれ

伊良湖の島の 玉藻刈り食む

先生としてもはつきり記憶している訳ではありませんが、万葉集を照合すればまあこんなことにもなりましょうか。殊に若ものたちには古典的教養がありませんので、この歌の話でもしてやったら夫子らは意外に喜ぶかも知れません。万葉集は若もの向きの古典であり、貴種流離譚は誰でもわが身に引きつけて聞くものですから、悪い気持のする筈はありますまい。

先生らの泊った宿は格子の暗い天井の低い商人宿で、丹後の僻地ではこれが普通のことなのですが、先生は生来の古風な感情から、また、学生らは超近代主義の復古調から、この種の宿屋を大層喜んでおります。床の間にかかっておりますのは田能村直入の青緑の山水、宿の出しました酒が「都の華」という地酒で、赤絵九谷の大ぶりの銚子にアツカンがしてある。京と鄙^{ひな}なとの混り合いますそのデリケートな趣^{おもむき}に一同恐悦至極のていであります。先生がかねて講義しておりする美学概論とやらは、例のフランス語や英語の直訳で、そのままにあの紅毛の趣味と感情の受売りですから、青緑山水にも赤絵九谷にも一向関係はありませんが、そこは学生た

ち、若い近代センスの直覺によつて、京と鄙ひなとの化学變化を、ちゃんと心得ております。こういうのが本当のソフィスチケーションと申すもので、平素先生が自任しているそれなぞは、老こ化に伴う濁濁現象こたぐみたいなものでありましようか。この間の事情は両者の緩衝地帯にいる梓君が一番よく見ている訳で、従つて、一番恐悦こえつしているのもこの人だということになります。

何はともあれ一同喜んでアツカンの「都の華」をのみました。この頃の若い連中はビール・ウイスキーをのまずに日本酒をのみます。これも先刻申しましたソフィスチケーションの一つなので、先生のはノミ助の單なる習慣ですが、学生の方は古典性に傾斜する現代知性の退廃たいはいということになります。なろうがなるまいが飲めば酔うもので、酔えば彼らは歌います。中に一人透明な好い声のものがおりまして、その声は惻々として聴くものの胸にしみ込んでまいります。

がしかし、一体彼のうたいます歌は英語なのか日本語なのか、それともキルギス・ダッタンの歌なのか、聴いていて先生にはさっぱり分らぬ。千二百年の昔、唐のインテリたちが聞きました胡歌の声というのも或いはこんなものであったのかも知れません。いま現に歌っているのは紫髯緑眼の人ではなく、まさしくわが愛する日本の学生であります。魂と感情においては、中華の胡夷におけるが如く、またその反対の如く、解らぬところだらけであります。先生悲しくなつてまいりました——辺城夜々愁夢多シ 月ニ向テ胡茄誰カ聞クヲ喜バン

と、歌つた唐の岑参しんじんとかいう詩人はさすがに苦勞人だと思ひます。

先生の一生は過去に溯るほど賑わしゆうございました、現在に近づくほど零落してまいります。曾て梓君に對しまして先生は、「オレの一生、初めの方の巻は賑わしく華やかで、末尾になるほど暗く淋しくなってきたよ。これでもしお終いが有難い仏さままで終ったら、宛然としてこれ即ち中世の繪巻物やないか」、と言つておりました。幸い梓君は相手になりましたが、今度もまた先生は生半尺の知識で間違つております——初めよいよい、終りが淋しい、そんな組立の繪巻物は一巻もありませぬ。繪巻物と申すものはもつとこつてりと目出度くできております。ふつふつと湧く新酒のように、出来立てのアンコロ餅に砂糖をかけたように、こつてりと甘くできております。ここのところがフランス語や英語仕込みでも一つ合点がゆかない。もつとも、先生御自慢のその西洋語の世界でも、向うの羊皮紙ペイチンとやらでこしらえた本の挿絵を見ますと、やつぱり日本の繪巻物同様、こつてりと甘く目出度くできております。どうも先生らインテリと言われる連中は物を見る眼が慌てふためいているのではありますまいか。別して今日、先生らにほんとうに慌て騒がねばならぬほどの差迫った問題がある訳ではないので、問題なくして慌てているとは、これは相当病膏肓のクチでありますよ。

まあそれはともかくと致しまして、先生が自分の一生を繪巻物に譬えておりますのには、漠然としたムードとしましては、幾分それらしいところもないではありません。殊に「どうもオ

レの子供の頃の賑わしさには餓鬼草子や地獄草子の面影がある」と言いますとき、先生は満更嘘を言ってる訳ではないので、幼い先生の姿をあれらの絵巻物の一隅に画き加えましても、割合よく似合うような気が致します。これは何も思想観念の高所の視点から申すのではないのでして、単に景色や姿として先生は割によく似合います。序でをもつてつけ加えておきますと、鎌倉時代のあの鬼や餓鬼どもの生態は少なからず滑稽でありますが、先生のそれもまた少々滑稽なのであります。先生にはその煩惱・妄執（そして歓娛）にさえつねにうっすらと滑稽の影が付きまっております。この点におきましても、また先生の一生を絵巻物に較べますことは、テンからの的外れと言いつけるのは少し酷でもありませんようか。

先生の家は大阪上寺町の曼陀羅院の横丁にありました。曼陀羅院と申しますと、若い頃の契沖阿闍梨が住んでおりました真言宗の名刹で、この寺に祀った背中合せの縁結び・縁切りの神さまは島ノ内の玄人筋の女たちの絶大の尊崇を集めております。ここの境内を幼い日の遊び場所としておりました先生らは余りよい教育をうけたとは申しかねます。例えば、お詣りになるきれいな姐ちゃんたちは、大半は縁切り・縁結びの順で神さまに手を合せて行きますが、かなりしばしば、縁結び・縁切りの順に廻る姐ちゃんらのあることを先生ら子供は目ざとく見つけておりました。こんなことは、子供は勿論、大人になっても知らぬ方が上品と申すものでありませんよう。

大体先生の家のあった辺りは維新前後には馬場先の色町と申しまして、船場・島ノ内から天

王寺にお詣りする途中の休みどころとなっております。現に先生の家もその頃は芸者の置屋であつたらしく、もはやがらんと荒廃してはおりますものの、その隅々には維新前後の紅白粉のしみ込んだような氣のする家でありました。この家の戸主は先生——とは当時もちろん申しませぬ、幼年の京屋の吉ちゃんでありましたが、その吉ちゃんがお祖母さんと二人で暮すのが家としては正當な構成でございました。ところがこのお祖母さんなる人、仏ごろよりはむしろ男氣がありまして、一家一門の間から孤児、或いは、それに準じる薄倅の児らを集めてきたものですから、元芸者の置屋は今や一変して託児所の光景を呈するに至りました。こうなりますとお祖母さんのお道楽はこれまさに一箇の詩心のなすわざとも言えましよう、

われときて遊べや親のない雀

と、弥太郎一茶があはれに詠みましたあの詩心でございます。但し、詩心というものはズボラなもので、詠むだけ詠みますと後ははっておきますから、先生の家はついに叔父叔母やらイトコハトコやらでごちゃまぜの雑禽類の小屋のようになってしまいました。幼い先生をはじめとして少年少女の群は、衣食住だけを辛くも給せられ、後はそれぞれの才覚と力倆とによって勝手に生きて行け、とまさか言われる訳ではありませんが、事實はそういうこととなりました。先に言いました先生幼時の賑わしに、一抹地獄草子や餓鬼草子の影がさすと申しましたのはこのところで、蛙や兎や猿が紛然として遊んでおります高山寺のあの絵巻は、あれは六道絵の傑作と申しますが、それなら、先生幼時の生活はあれとそっくりでありました。あながちに